

## I-01.日本人が英語を苦手とする、その理由

### —曖昧日本語:察する文章、漢字は「感じ」で理解—

英語が論理表現に適している言語であるとするれば、日本語は詩歌の表現に適した、極めて叙情的な言語と言えるかもしれない。その曖昧さと余情が、色彩と造形の世界とあいまって、日本の美を作り上げてきた。外国の方が日本語を習得しようとするればその曖昧さという障壁を克服することは難事業だろうな、と同情もしたくなる。

一方、世界の人々を相手として意識したときに、誰にでもわかる平明な表現というようなことを、われわれは意識してきたであろうか。そのための努力をしてきたであろうか、否である。

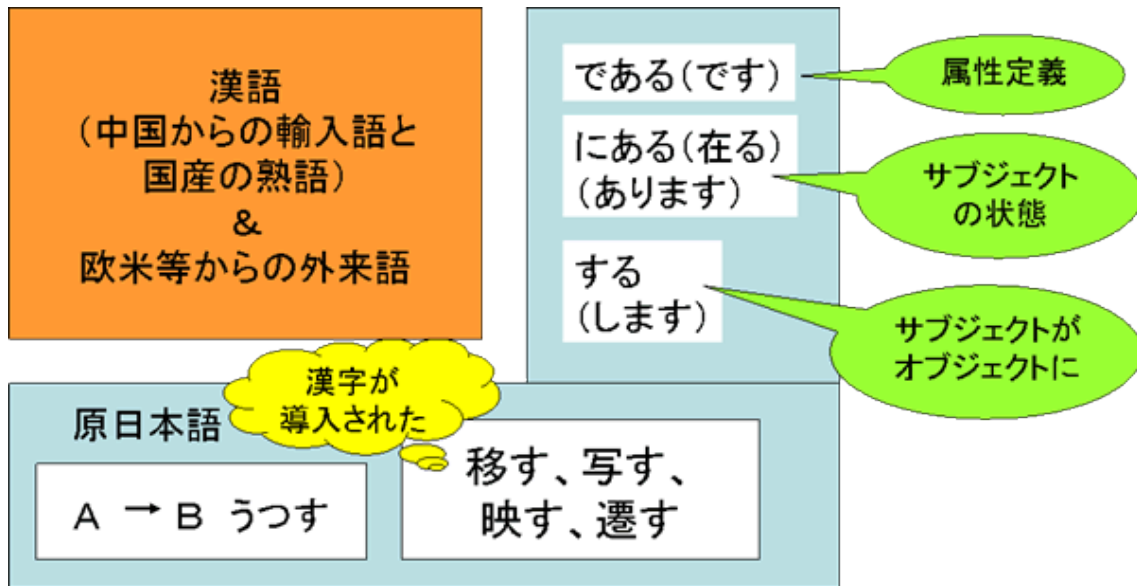
世の中に溢れている日本語文章の特徴の一つは、文字が意味を持つ漢字に依存して、私が何を言いたいのか「お察し願います」というスタイルであり、受け手(読み手)も「およそこのような意味なのでしょう」とわかったつもりで収めてしまうところにある。

この相互関係の結果、文章の構造は極めて自由であり、設計図無しに家を建てているようなものである。「柔構造」といえば聞こえは良いが、各人がそれぞれ「自由気まま」に書いている文章と言える。これに反して、英語をはじめ欧州言語による文章は、論理的にしっかりと組み上げる「構造的な文章」といえる。

漢字は言うまでもなく、言語を表記する記号であると同時に、一つの文字自体が意味を表現している。西洋のアルファベットは単に記号であり、意味を伝えるにはその記号をいくつか組み合わせる「単語」に仕立てあげる必要がある。

企業内の報告書から官庁の通達文書まで、あらゆるところであいまいな日本語文章が溢れている一つの原因は、このなんとなく「感じ」で分る「漢字」を使用しているところにある。文章を書いている人は、「なんとなく」、読み手がわかってくれるだろうとの甘えがある。一方、読む人は、「なんとなく」わかったつもりになって満足している。このような相互関係の下では、曖昧文書が厳しく指摘されることはない。

(篠原ブログ:2006/10/25)



## I-02.文化が言語を生み、言語が文化を育てる

ある程度の、同一的なモノの観方や考え方を共有している集団は、同じ文化を持っていると見なすことが可能である。その、モノの観方や考え方は、言語で表現される。同時に、人は言語でもって物事を考える。従って、文化と言語は極めて密接な関係があり、一つの文化を共有している集団は、母国語もほぼ共有していると見なすことができる。文化が言語を生み、言語が文化を育てると言われるゆえんがここにある。

母国語とは、物事を考える言語である。例えば、厳密な意味で「バイリンガル」と呼ばれる人は、二つの言語で、どちらでも考えることができる人を指す。例えば筆者(篠原)は、日本語で思考しているので、母国語は言うまでもなく日本語である。その他の言語は、意識して学習したものであるから外国語である。

モノを観る方式は、言語の構造に反映される。モノを考える順序は、その言語の順序に反映される。これによって、人は快適(\*)に観察し、考え、それらを話し、書くことになる。単純化を恐れずに、西ヨーロッパの人々(\*-2)の、モノの観方、考え方を纏めてみる。

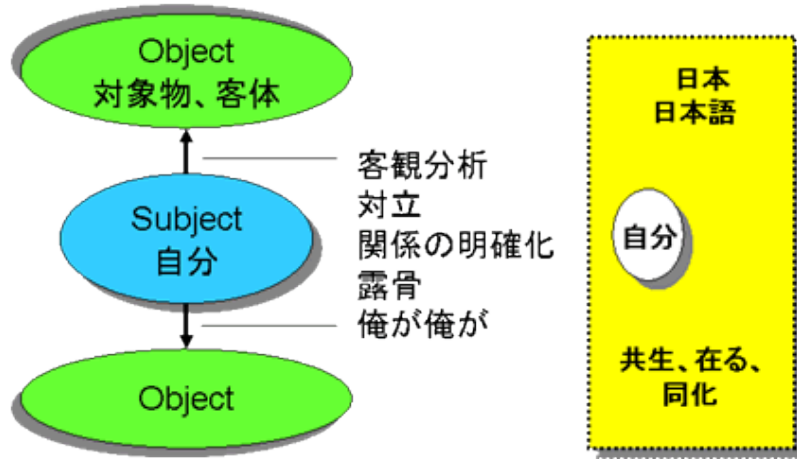
まず自分が何者であるかを、自然や他者との比較することで自分を確認する。つまり自分が、ある環境の中で“何を、何のために”しているのかを絶えず確認し続け、機会あるごとにそれを表明する図式となる。それは、他者と自分を対立する客体(Object)として、客観的に(objectively)観察し、分析し、評価し、報告される。

ここから自然科学が生まれ発展する。また人間が構築した社会も同じように眺め、分析し、評価しようとする。これが社会科学へ繋がる。これらの基本姿勢から、自然や他者に関する報告を重視し、その情報収集に勤め、それを分析評価する作業(インテリジェンス)を重視し、そこへの働きかけを、戦略的計画の下に行うという形が出てくる。すべてが自己から発しているために、しばしば、自己に都合の好い色眼鏡つき分析をして、失敗するというケースもあるようだ。

(\*) : 頭の中で衝突を起こしたり混乱したりせずに、意識せずに行えるという意味で使っている。

(\*-2) : 西ヨーロッパからアメリカ大陸に移住した人々も当然この中に含まれる。

アングロ世界のものの観方、考え方  
—英語の構造—



## I-03.日本人の「物・事」の観方や考え方

自然・環境の中に溶け込んで存在している自分を確認し、その自然・環境の説明をつけて、自分の存在を「控え目」に表明する。つまり、自然を客観的に眺めることはせず、その中に溶け込み、自然と一体化する。当然ここからは、自然科学は生まれない。

人間以外の生物を含めて、自分と同列の、つまり対等の存在と認め、その相手との関係の中で自分の存在を確認する。従って自己表明は、相手の存在を意識し、調和を最優先してなされる。つまり、常に全体の中の自分という図式での確認であり、全体を語らずして自己を語ることは難しい。

以上のように、文化の違い、つまり、モノの観方や考え方の違いは、当然言語の違いに反映される。それは、言語の構造の違いと、表現の順序の違いとなって現れている。

### 古池に蛙が飛び込んだ、それがどうした！

「古池や蛙飛び込む水の音」。ご存知、芭蕉の名作である。

日本人であれば、ほとんどの人が、この句から、そこでの場面を頭の中に映像化することができるだろう。静寂に満ちた林の中の池から響く水の音さえ聞こえてきそうである。

我々日本人は、この名作を味わうに足るだけの日本語力を備えていることを、神か仏に感謝しなければならない。もし外国人が外国語として日本語を学習したのなら、何十年かけてもこの句を味わうことが出来ないまま終わるかもしれない。

さて、それほど深く日本文化に根ざしたこの句を、英語でその内容を説明するとなると、これは大変な作業になる。

### 英語で説明しようとする、こんな風になるのか？

「音がした、(どこから)古い池の水面から、(いつ)蛙が水に飛び込んだときに」。英語の達人がどう細工しても、面白くもおかしくも無い、ただの状況説明文になってしまうだろう。

それでは、主語を観察者である「私」に設定するとどうなるか。「私は聞いた、(どこで)古い池のほとりで、(何を)音を、(何の)蛙が水に飛び込んだ時の」。これも、味も素っ気もない。

さらに、これが「観察報告」であれば、次のような説明不足が指摘されることになるろう:

- (1) 飛び込んだ蛙の種類は、ガマ蛙か、殿様蛙か、青蛙か、
- (2) 古い池とはどれぐらい古いか、人口の池か、自然の池か、どこにあるのか、
- (3) あなたはその時どこにいたのか、何をしていたのか、
- (4) 蛙が飛び込む姿を目撃したのなら、なぜそれを主題にせず、その行為の結果として派生した音を、主題として報告するのか、

日本語のリズムの土台を作っている5・7・5の俳句は、読み手と受け手の感性に基づいた叙情の世界であり、これを英語に移し変えるのは至難の業となるだろう。なぜならば、英語は、動機や目的の説明、状況の正確な説明に基本を置く言語だから。

(篠原ブログ 2005/09/06)

## 叙情の日本語と状況記述の日本語

### 古池や 蛙飛び込む 水の音 芭蕉

私は	古池に蛙が	
	飛び込むのを	見た。
私は	古池に蛙が	
	飛び込んだ音を	聞いた。
	私が古池のほとりにいた時	
	蛙がその池に	
	飛び込んだときの	
音が		聞こえた。

## I -04.英語の特徴と日本語の特徴を比較する

### 英語の特長は、

1)、主体 (Subject) 抜きでは事が始まらない。S が何であり、それが何をしているのか (V)、客体 (Object) に何を働きかけている (V) のか、をはっきりさせる。流れも、この SVO に固定される。モノの観方の基本形であるから、この順序は変えられない。

2)、自分が何者であるか、先ず主張し、その後で解説を加える。つまり重要なことを先に述べ、次第に瑣末の事項へと続く。

### 日本語の特徴は、

1)、主体が全体の中に溶け込んでいるので、S を表面に出さなくとも、言語として成り立つ。しかも、全体の説明から入るので、O を先頭にでも、途中にでも配置でき、何をどうしているのか、V を最後に置きさえすれば、その途中は自由に並び替えることができる。

2)、同じく、全体の中の自分ということから、全体を説明してから主張なり結論を述べる。これは、存在の基本形であるから、言語においてもこの順序は変えられない。

日本語には主語 (subject) が無いと、極端な意見を吐く人もいるが、主語が無いのではなく、表に出さなくとも言語としての形を取れるということである。つまり主語は存在するのだが、あからさまに表に出すことを控える、出さなくとも理解してもらえる文化の下での言語である。

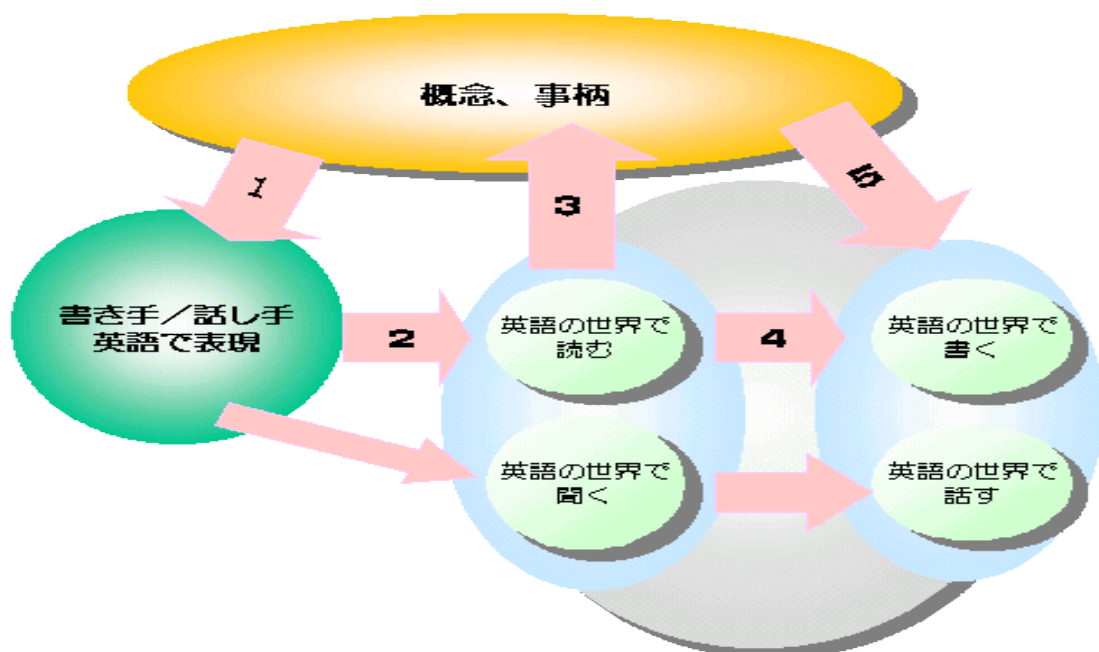
### 主語の「有り無し」の議論について、

日本語では主語無しで語られ書かれることが多いのは事実であり、それが特徴でもある。文化としての日本語を良いとか悪いとかを議論するつもりは無い。ただ世界の普遍事項、共通事項を世界の人々と語る場合には、どうしても主語をおく必要がある。そうでないと理解されない。

したがって、主語を置くようにとの教育は間違っていない。しかし、明らかな誤りは、文化としての日本語を語る場合と文明として世界へ伝える日本語の場合の区別せずに教えていることにある。何でもかんでも主語は必要だ、などと教えれば、一部の言

語学者が烈火のごとく怒るのも理解できる。

技術をはじめとする自然科学の分野や政治や経済の社会科学の分野で、何ごとかを表現するためには、欧州の言語と同じように主語をきちんと置いた文章で書き表すことは必須の条件である。そのときには「外国向け」の日本語を使えばよい。この場合の日本語は主語が必要となる。(篠原ブログ 2007/02/12)





## I-05.日本人は、なぜ英語が苦手なのか

—多くの日本人が、英語を苦手(戸惑い)としている理由は、

### 「言語処理手順」の違い—

日本人が英語苦手であることは、自他共に認めるところである。その優秀な頭脳との対比において、“日本の七不思議の一つ”などと西欧人にかからわれたりする。“頭が良いのに、たかが英語ぐらいできないのはおかしいじゃないか”、と。しかし、苦手なのは当然である。その理由は、

1)、人は言語(母国語)で考えるので、観方や考え方の違いは、処理する順序に現れられる。英語と日本語の順序が違うことは、日本語処理手順にはそのままでは乗らないことになる。コンピュータ風言えば、日本語オペレーティングシステム(OS)では、手順が違うので、処理できないことになる。処理不能の情報が入ってきたときの反応として、最も自然なのは、拒絶反応である。つまり、英語を言語として受け入れ処理することを、玄関口で締め出すという対応になっているのだ。

2)、異なる処理手順でモノを考えようとすることは、至難の業であり、頭脳に多大の負荷を掛けることになる。その作業は明らかに苦痛であり、とりわけ、なぜ異なるのかという理解無しに、ただ闇雲に外国語を覚えることを強制されれば、その苦痛はさらに増えるだけである。

3)、英語と取り組む第一歩は、何よりも、日本語と英語では、処理の手順が異なるという事実への認識におかなければならない。しかし、この認識は果たして行われてきたのか甚だ疑問である。

#### ・言語として違いすぎる:

モノの観方や考え方の違いから発して、日本語と英語(西欧語全般)の構造、つまり表現する順序が違いすぎるので、受信・発信の処理が極めて難しい。英語が苦手なのは当たり前と言える。

#### ・教育方針と方法の誤り:

この違いに正面から取り組み、学習の解決策をはかるのではなく、また、なぜ英語を

学ぶのかという目的を明らかにしないまま、無理やり英米の「文化英語」の学習を押し付け、英語を日本語で処理するやり方ばかりを教えているのが、これまでの学校での英語教育であると思う。これでは、大半の生徒、学生が英語嫌いになるのは当然のことである。

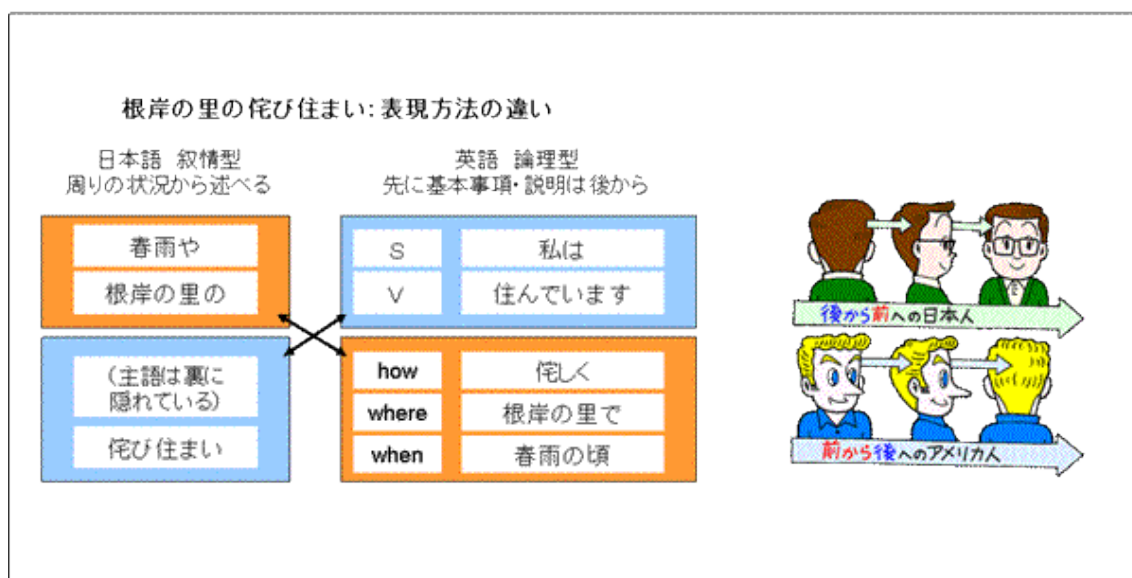
・日本風味付け:

日本人は、海外の文物の取り込みは大好きであるが、すべて日本風味付けをしないと受け取らないという文化風土の中で何千年生きてきている。これは大きな利点であると同時に、海外の文物を生そのまま受け止め、対決する厳しい姿勢に欠ける結果となっている。

・何でも日本語で:

日本語の構造上の柔軟性とカタカナという便利な道具のお蔭で、そして上で述べた文化風土と知識への強い需要のもとで、自然科学から哲学まで、世界の政治経済から芸能の出来事まで、何でも日本語で学び、情報を入力することができる。これが近代工業化成功の原動力となり、同時に、自分の都合のよいようにしか世界の物事を受け止められない「日本村」を作りだしている。

表現方法の違いを知るだけでも上達する



## I-06.英語の学び方を改善すれば、英語の上達は早くなる

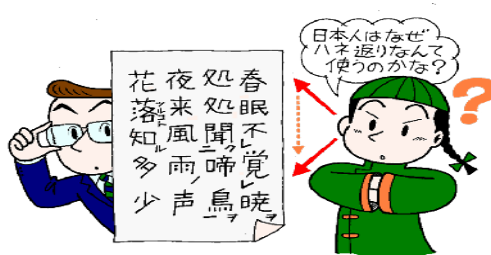
日本語処理手順の上でいくら英語を解剖しても、言語としての英語が身に付かないことは既に述べた。同時に、英単語とそれに相応する日本語単語のデータベースを頭の中にいくら増やしても、つながりを表現できなければ、それはまだ言語にはならない。それでは、日本の学校での英語教育は、生徒・学生にいったい何を学ばせ、身につけさせようとしているのか。

### 英文和訳

日本での英語教育の最大の問題は、英文和訳という「学習」を強いているところにあると思われる。この作業は、英語文章を、日本語処理装置(日本語オペレーティングシステム)にかけ、日本語処理手順で英語文章を「解体」し、日本語順序に並べ直して、日本語文章として表現することにある。日本語処理の頭で英語に接している場合、既にそれは言語としての英語ではなくなり、解剖対象の物体のようなものとなっている。英文和訳の勉強は、英語の教科というより、むしろ国語の教科というべき状態にある。

### なぜこのような学習方法が

日本人は、歴史以来、外国から事物、概念、システム等を輸入して利用するとき、すべて「日本風」味付けをするという文化的習慣があり今も続いている。この習慣は、もちろん多くの面で利点として作用し、その結果、日本という存在の確証証明は保持されてきた。一方、欠点も当然あり、その最たるものは、海外の思想、概念、制度、システムといったものを「自己流に」理解し、それで理解したと思い込むところにある。生のまま、まな板にのせて、その本質を分析してやろう、という対決の姿勢は出てこない。



## I-07.英語には、「文化英語」と「文明英語」がある

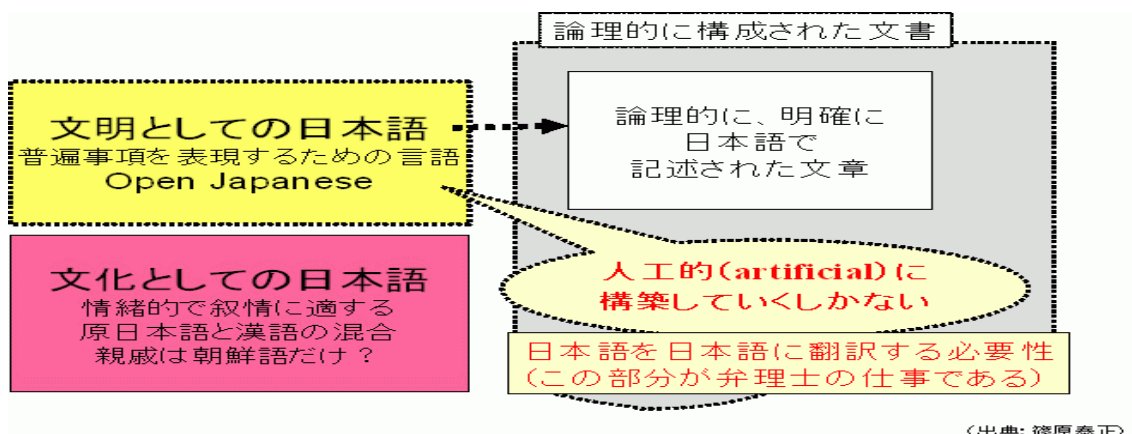
一つは、いうまでもなく、英語を母国語としている人々が使う英語(文化英語)。もう一つは、母国語を異にする人々の間で、コミュニケーションを取るための手段として、唯一のものとして、(仕方なく)使う英語(国際共通語)。日本の英語教育は、そのどちらを習得させようとしているのかが分からない。

### アレルギーを起こさせるため？

処理手順が大きく異なる言語を学ぶことは、大変なことであることを述べてきた。その上に、更に文化としての英語を押し付けられれば、先ず大半の人はアレルギーが生じるのは当然か。イギリスや米国の文化が、外国人に分かるわけもなく、発音が同じようにできるわけもない。生徒・学生全員が「英文学者」になることを目指しているわけでもない。何で、文化に深く根差した慣用的な言い回し(イディオム)などを教室で勉強しなければならないのか？英語を嫌いにさせるための嫌がらせか？

### 言語として扱っていない

学校で英語教育が必要というのなら、基本としては、英語というものを題材にして、言語というものに興味を持たせ、結果として日本語の能力を向上させる目的もあるはずだ。国際化した社会の中で、その前線で仕事をしたい者には、コミュニケーションのツールとして、国際共通語としての英語処理能力を身に付けさせることが目的である。英米の文化、社会、文学等に専門的興味がある者は、大学で専門的に学べば良いし、ルイビトンのお買い物ができるようになりたい人には、街の英会話教室が用意されている。



## I-08. 優美な日本語 「和をもって尊しとなす」

### 英語教育の目的を明確に

英語が小学校・中学校での義務教育で必要と言うならば、その目的は、英語という存在を通して言語への興味を持たせ、日本語力の向上に役立てることにあると信じている。但しグローバルな環境で仕事をせざるをえない人、そのような環境で仕事をした人にとって、英語の修得(読み書き、聞く話す)は必須の課題である。

### インテリジェンス力を高める

英語を修得する目的の一つは、自分自身と、属する集団(会社など)のための「インテリジェンスサービス」力の向上にある。日本語というバイアス(bias)が掛かった情報で海外の事柄や外国の人々の考えを理解したつもりになることは、大きな危険をもたらす。

### 文明の説明、表現ができる

技術や社会システムなどは、世界に普遍性を持つ「文明」といえる。これらを英語で表現できるようになることが好ましい。表現できなければ権利も主張できないし、説明責任も果たせない。

### 日本語のすばらしさを認識

日本語は、数千年の歴史をかけて磨き上げてきた優美な言語であり、西欧の言語がローマ文明の力を借りて(ラテン語)その洗練度を上げたように、日本語も中国文明の力を借りて、つまり多くの言葉と漢字という文字を輸入してその洗練度を上げてきた。(\*)中国の知的財産である文字と、その文字で表された概念を有史以来、無料で使ってきたので、その使用料を払えといわれると莫大な額になるだろうという笑い話がある。

しかし、西欧の言語のように、狭い地域で互いに刺激しあいながら磨いてきたのと違い、かつては中国からの輸入、幕末以降は英蘭独仏語の輸入以外は、日本語は自分達だけで磨いて来なければならなかった苦労もあった。結果として、日本語は世界の中で、特異ではあるが上質の、叙情的ではあるが論理的表現も可能な、極めて有用な言語としてその地歩を保持している。世界の知的財産の一つと言える。

文化が言語を生み、言語が文化を育てるわけだから、全体として、日本語は磨き続けなければならないし、一人一人にとっても、思考と言語が互いに深く関連しているものである限り、日本語を扱う能力の向上は必須の課題である。

その意味で、思考力と言語力がまだ発展途上の幼児や小学生の時から外国語を学ばせることは興味のある試みといえるが、もろ手を挙げて賛成できない。個々の親が何を考えるか、それは勝手であるが、国の施策として出すとなると、暴挙というか無謀というか、表現に困る。また、英語やフランス語と比べると日本語は程度が落ちるといふ人もいようだが、本当にそういう人がいるなら、その人の日本語能力知が疑われる。



## I-09.言語を基盤にして「物・事・考え」を表現するのが人間

母国語以外の言語で「モノ」を考え、その結果を表現するということは、特に日本語のように、西欧言語とその処理手順が大きく異なる言語を母国語としている我々には、大変な難事業となる。それでは、日本における英語教育は、どのような目的で、方法で行われているのであろうか。

### 言語として扱っていない

一つの考えを表現するには、そこに、言語として必要なまとまり、つまりセンテンスを形成していなければならない。他とのつながりを持たない単語だけを並べても、そのレベルでは、何を言わんとしているのか相手に伝わらないので、まだ「言語」にはなっていない。

日本語処理手順の上でいくら英語を解剖しても、言語としての英語が身に付かないことは既に述べてきた。同時に、英単語とそれに相応する日本語単語のデータベースを頭の中にいくら増やしても、つながりを表現できなければ、それはまだ言語にはならない。それでは、日本の学校での英語教育は、生徒・学生にいったい何を学ばせ、身につけさせようとしているのかハッキリさせて欲しい。

日本語は英語と比べると劣性なので国語を英語に変える？外国人と道で会ったら「ハロー」と言えるようにする？海外でハンドバックのお買い物ができるようにする？米国に移住できるようにする？教養を高めるため、少しは英語が分かるようにする？いずれにせよ、英語教育の意図は、どう考えても明らかではない。



## I-10.英語を学ぶ人に、これだけは伝えておきたい！

筆者(篠原)は、SLE 塾で論理思考を身につけて論理的に表現することの必要性を強く訴え続けている。世界の人々へ、世界の共通分野での「物・事・考え」を伝えようとするなら、論理的に筋道つけて説明しないと、理解を得られない。つまり世界の中で、それなりの役割を果たすためには、「面倒だけれど」論理的であらねば、という必要性を理解して欲しい。

しかし一方では、日本人としてのアイデンティティを失ってはいけないことを強く訴えている。誤解されると困るが、論理性と「人間としての正しさ」は必ずしもイコールではない。論理的にものごとを考え、表現する根元の所に、「人間としての正しい心」がなければ、論理的に怪しげなシステムを考え出し、論理的にとんでもない戦略を立案し、論理的に嘘をつく行いが横行することにもなる。論理的思考と表現能力を身につけることは、人間としての品質が向上することを必ずしも意味しない。

英語は対立の図式で表せる文化の下にある言語であるとも言える。従って英語で事実報告や考え方や分析された情報を受け取る(主に読む)、英語で表現する、英語で討議するという場合には、英語力が高くなればなるほど、英語を母国語とする人の、この対立の図式の基で、思考や分析、議論を行うことに繋がる。これは、日本人としてのアイデンティティや、企業や国という団体の利益保持という面からは、極めて望ましくない危険なことである。

実際のところ、英語およびその背景の文化にあるこの対立の図式が、今日の世界における様々な摩擦の原因の一つになっていると言える。グローバルな環境で、英語で戦う戦士たちが、深い経験を積み、日本人であることを忘れなければ、そこから初めて、われわれの、日本式の生き方を、英語を使って表現していく場面が見られるようになるかと考えている。そのように期待をしている。

日本人としてのアイデンティティは見失うな、まず日本語を身につけろ、そして英語の力は数段伸ばせ、と相反することを要求することになるが、それは日本人として克服しなければならない大切な事項と考えている。